

『友人T③』

**

僕は、テレビの画面に釘付けになっていた。

なぜなら、F1レーサーから内閣総理大臣に転職する人間の記者会見がもうすぐ放映されようとしているからだ。

この日のために購入した十六インチ型の液晶テレビを前に、今まで感じたことのない想いを抱きながら待つこと三時間。

気持ちの整理が追い付かなくて予定よりも大幅に前倒ししてテレビの画面と対峙する羽目になってしまった。ついでに言ってしまった、そのせいなのか、おかげなのかは分からないが昨夜は一度もレム睡眠にたどり着いていないと思っている。

どんな時でも僕の期待を上回るTが、どんなパフォーマンスを披露してくれるのかを考え始めたら熟眠する暇なんて与えて貰えなかった。

想像が想像を呼んで、とんでもない事態が巻き起こるのではないだろうか？ と感慨深さが充満して居ても経っても居られなくなってしまったのだ。

『他人を想って眠れなくなる君は筋金入りのロマンチストやなあ』

Tの姿を思い浮かべていた僕の耳の中に無数のシャッター音が流れ込んできた。

テレビ画面を凝視する。しばらくして、スーツ姿のTが映し出された。瞬間、『レオタードとかウインドブレーカーとかで現れてくれるかもしれない』と抱いていた期待がままと外れた。

歴代と同じように歩き、立ち止まり、一礼して、シャッターチャンスを与え、前方を向き、もう一度、頭を下げる。

『冒頭、総理から発言がございます。総理、お願いいたします』

画面に映るスーツ姿のTがひとつ間を空けてから口を開いた。

「本日、正式に内閣総理大臣に就任をさせていただきました……」

耳のなかを通り抜けていくTの言葉にげんがりしている自分に気が付いた。過度の期待

を抱えていることぐらい分かっている。あの場所に立つことすら許されない分際で何を偉そうにしているんだ。傲慢にもほどがあるだろう……。

すべて承知の上。

でも、彼ならどうにかしてくれるんじゃないか？ という淡い期待が僕のなかで泳ぎ続けていた。彼ならすべてをぶっ壊してくれるのではないか？ いや、いくらTでもこの場所には太刀打ちできないか……。

歴代と同じように発言する彼の姿を見ている僕は、世界の大きさを痛感していた。

三十分ほど眺めていた。特に変わった様子もなく、全国民の想定内に納まるTの姿が流れ続けていた。伴って、僕の肉体に宿る熱量がじわじわと薄れていく。

期待するって馬鹿馬鹿しいよな。

熱量が底をついた僕は、『これ以上見ていられない』と思って、テレビのリモコンを掴んだ。

その時、

ガラガラガラ。

と、部屋の窓が開く音がした。

反射的に、『ここは三階だぞ？』と言って振り返った。

すると、開いた窓からフルフェイスヘルメットが飛び込んできた。

え？

驚きすぎて動けない僕に構うことなくフルフェイスヘルメットを投げた彼の顔がひよっこり現れて、右手をあげた。

「ご無沙汰、ご無沙汰」

僕は、テレビの画面に目をやった。
そこには間違いなくTが映っていた。

「生放送じゃないの？」

僕は画面に映るスーツ姿のTから目を離して、三階の窓から部屋の中に入ってくるアロハシャツ姿のTに視線を移した。

「どういうこと？」

僕の部屋に降り立ったTは部屋を見回しながら言い放つ。

「君の家はいつでも落ち着く匂いがするなあ」

開いた口が塞がらないとはこういうことなのか、と身を持って体感した。

状況がまったくのみにめていない僕を見て面白がるTは内緒話をするように言った。

「替え玉作戦やがな」

開いた口が塞がらない状態で開いた口が塞がらなくなる、ということが如何にややこしい状態であるか身を持って体感していた。

「あれはTじゃないの？」

「せやで」

熱量が、燃えさかる。「じゃあ誰なの？」

「最新の人工知能」

「え？」

「AIだあ」

Tは、ポケットからカントリーマムのバニラ味を取りだして口の中に放り込んだ。

「あれはロボットなの？」

「せやで」

「嘘でしょ？」

テレビ画面に映るTは、どこからどう見ても人間にしか見えなかった。

「この世には信じ難いものが山ほどあるのに……」

彼が頼張るカントリーマムが全て彼の喉元を通り過ぎていく。

「何をもって嘘だと感じている？」

僕は、何も答えられなかった。

「もちろんあれがロボットだってことは誰にも伝えていない」

Tは次の言葉を聞かせるように少しだけ、間を空けた。

「知っているのは君とロボットの発案者だけだよ」

「他の皆は本物のTだと思っているの？」

「せやで」

「そんなことして大丈夫なの？」

「知らないことの方が圧倒的に多いはずなのに何で誰も疑おうとしないんだろうなあ」

ハイビスカス柄のアロハシャツを身に着けているTはテレビ画面に映るスーツ姿の替え玉を見ながら言った。

「思い込みで作られた世界を、逆手にとってみた」

Tの寂しそうな表情を見たのは、この時が初めてだった。

「F1レーサーになって世界を飛び回った。そうしたらな？ 見えてくるものがあつたんや」

なに？ と聞いている自分がみずばらしく思えた。

「ぜんぶがぜんぶ、違うということや」

Tが手の届かないところに行ってしまったような匂いがした。それとも、これがカントリーマムの匂いなのだろうか？

「文化も暮らしも言語も何もかもや」

Tはポケットから二枚目のカントリーマムを取り出した。

「それなのに何で皆、同じを求めるんやろう？」

分らないよ……。

用意された言葉しか放てない自分の不甲斐なさを実感する。

「世界を回って各国特有の文化に触れて、意見の異なる大勢の人々と出くわした。こうした環境に長い時間浸ることで少しずつ違いを受け入れられるようになっていった。まずは、違うことを知らないあかん。頭だけで知った気になっても意味がないで？ 肉体で知らないあかん。すべてが違うのを知ったらあとは簡単や。与えられた自分の役割を全うすればいいだけや。人間、一人一人が目の前の現実を全うすればいい。国も一緒や。母国の役割を知らないあかん。そのためにはもう一つ広い観点から見極めないとあかんねん」

Tはテレビ画面に映る自分のクローンを見ながら淡々と言葉を吐いていく。

「だから、我が国以外を見て回った」

テレビ画面に映る替え玉は、淡々と想定内の言葉を洩らしている。

僕の脳裏には過去のTの姿が浮かび上がっていた。

「そのためにF1レーサーになったの？」

Tは、誤魔化すように両肩をあげた。

「辻褄を合わせたって感じやなあ。君のおかげでF1レーサーになれたからその先の未来を自らの手で創りあげたんや」

不意に、大きすぎるオナラが出そうになったから必死で堪えた。
見透かされないように、言葉を放つ。

「なんで総理大臣になろうと思ったの？」

「面白いから」

それだけ？　　と言いながら納得している自分が居た。

「面白いことをしていたい」

Tは三枚目のカントリーマムをポケットから取り出した。

「そのためには面白い国でないと張り合いがないやろ？　いくら個人の集まりが優雅に飛び回っても根底が変わらんことには何も変わらへん」

「だから総理大臣？」

「国の母になる」

Tの言葉を聞いてすぐにカントリーマムを思い浮かべた自分を少しだけ誇らしく思えた。

「じゃあなんで替え玉を使うの？」

「端から職務を全うする気なんてないよ」

彼の言っている意味が分からなかった。

「建前ばかりの環境にどうしてわざわざ飛び込まなあかんねん。俺は面白い人生を満喫したいだけであって、偉くなりたいわけじゃないのよ」

彼の言っている意味が分からなかった。

「だから、人工知能に任せることを思いついたんや。去年一年間の俺の言動をすべてインプットさせてな？　そこから今後五年間の未来予想図をプログラミングさせて無限大の可能性をアイツ一台に組み込ませた。立派な職務を全うしてくれるとおもうで？」

「そんなことできるの？」

「知らないところで知らないことがうごめいている。目に見えているのはごくごく一部なんやで？」

世界を見て回った人間の言葉には重みがあった。もし僕が同じ言葉を吐き出したとしても軽はずみな発言にしか聞こえないだろう。扱う人間が違うだけでこんなにも言葉の重みが変わるのか、と分かりきっていたことなのに今初めて身に染みて味わった気がした。

「でも、一つだけ組み込ませられへんもんがあったわ」

Tは自分の世界観で言葉を紡いでいく。

「それは何やと思う？」

瞬発的に言葉が零れていた。「ミラーボール？」

僕の人差し指をなぞったTの視線は、天井にあるミラーボールを捉えていた。

「君はいつだって鋭い」

正直、彼が何を言いたいのか分からなかったけど僕は会話の継続を優先させた。

「回そうか？」

「よろしく頼むよ」

僕は立ち上がり、開けっ放しの窓を閉めて、遮光カーテンも閉めた。三歩歩いて部屋の電気を消して、ミラーボールのリモコンを手にとって、スイッチをオンにした。

ぐるぐる回る色とりどりのライトが部屋全体を包み込んでいる。

僕とTはしばらく空間に身を委ねるように口を閉ざした。

二人で画面に映るロボットを観察した。

唐突にTが口を開いた。「いかに、全体像が見えているか」

僕は、『ミラーボールのライトを赤一色にしてみたいなあ』と思っていたところだったからそっちの方に意識を取られていたみたいでTの声があまり聞き取れていなかった。

「赤に変えてもええんやで？」

リモコンを手に取りスイッチを押す。

僕の思っていることを何でも汲み取ってくれるTの凄さが、当たり前前になっているのに気が付くのは、彼を永遠に失ってからだろうか？

彼は常に、物事を先回りして、ゆとりをもって手を差し伸べてくれる。

それがどんなに凄いことであるのか、僕は彼との関係が長くなればなるほど忘れていく

のだろう。

「君は、この替え玉をどう思う？」

「想定内がつづいている気がする」

僕は、精一杯を言葉にする。

「本当の自分の言葉じゃない感じ。言わされている。合わしている。無難を貫いている」

赤いネオンに包まれる部屋。

言葉の色合いも変わっているような心持ちになった。

「君はいつだって鋭い」

Tは四枚目のカントリーマムに手を伸ばそうとしていた。

「だんだん本音を隠すようになってきた世の中に一石を投じたいと思わないか？」

僕はTに認めてもらいたい一心で言葉を探した。

「やっぱりミラーボールの色、青にしてもいいかな？」

「そう言ってくれるのは君ぐらいだよ」

彼は拍手で称えてくれた。

「建前の時代になりつつある世の中で君は本音を貫いている。これだから俺は君を信じつづけられる」

僕はミラーボールのリモコンを手に取りスイッチを押した。

「君がさっきミラーボールと答えた時、心が震えた」

「どうして？」

「そこにはユーモアがあったから」

瞬間、全身が脱力に襲われて肉体が宙に浮かんでいくような感覚に陥った。

なぜだろう？

ユーモアという言葉に神秘的な何かを感じたのだろうか？

それとも、カントリーマムの匂いがそうさせたのだろうか？

ぐるぐる回る青色のネオンに合わせるように思考がぐるぐる回っていた。

ユーモア、というワードに込められた想い。

忘れかけていた何かが目の前で大きく膨らんで破裂した。

「安心せい。新之助^{しんのすけ}さんは分かってくれてるから大丈夫や」

「じゃあ松田さんは？」

「分かってくれてる。伊藤山くんも博文くんも分かってくれてるよ」

「それ、同一人物やないかい」

何も考えていないのに言葉が勝手に飛び出していた。

「恐れ入ったよ」

彼は首を何度も縦に振った。そして、部屋を見渡しながら言った。

「このネオンのように隣の芝生はいつも青く見えるんやで？」

ユーモア。

「隣の芝生よりもこっちの芝生の方が青いと言い切れるような信念をいかに懸命に持ちつづけられるか」

Tは鼻から一つ息を吸った。

「それが、これからの課題になる」

閉ざされている空間なのに風がひと吹きだけ頬を掠めた。

「あのロボットに総理大臣を任せている間、Tは何をするの？」

「水面下で準備をするよ」

彼はミラーボールの色を青から黄色に変えた。

「任期が終わったらすぐにでも動くで」

「何を準備するの？」

「スターになる準備に決まってるやないかい」

「スター？」

「そのためには君にも手伝ってもらわなあかんねん。今日はそのためにわざわざ会いにき

たんやで」

抽象的な想像が、霧のなかに浮かんだ。

「いずれ俺はスターになる。だから君はスターイッツテツになって厳しく見守っててくれ」と、Tが言った。

「スターイッツテツ？」

頭の回転がわずかに遅れた。

「星田一徹さんやろ」

無理やり追い付かせようと名一杯、舵を切る。

「てことは、Tは星田飛雄馬ってこと？」

「せやで」

「何で？」

「大リーグボール18号を投げてみたいから」

「それだけ？」

「それ以外に何もないはずやで？」

僕の頭のなかには、『やつぱりTは凄いや』という文字が浮かんでいた。

「世の中には流れがある。その流れは急には変わらない。けれども、ほとんど誰も気が付かないうちに少しずつ動いてはいるんだ。だから五年かけて本音と建前の間に太い線を描く。そして、リアルとバーチャルを引きはがしてもう一度現実世界を呼び戻す。リアルがバーチャルに乗っ取られた世界で生きるのは、息苦しくて仕方がないからね……」

Tは、小さく息を吐いた。

「そのためにも大リーグボール18号を投げられるようになっておかないと話にならないんだよ」

「それは誰が言ったの？」

「花尾形さんもオジマさんも右門さんも口を揃えて言うてたで？ 伴内宙太さんが一番熱心に言うてはったけどなあ」

「会ったことあるの？」

「昨日、近くの大衆居酒屋で一緒にさせてもらたんや」

正直、Tが違う次元に行ってしまったと思った。

僕は意地でも会話の継続を優先させた。

「花尾形さんもオジマさんも右門さんも大衆居酒屋に居たの？」

「せやで」

「やっぱりユニフォーム姿なの？」

「誰がわざわざオフシーズンにユニフォーム来て居酒屋に出向くねん」

Tは照れくさそうにつづけた。

「私服に決まってるやないかい」

それから、僕とTは十五分くらい会話をつづけた。

「最後はオジマさんが眠っちゃってそろそろお開きにしようかって流れになってん」

Tは八枚目のカントリーマムを口の中に放り込んでいた。

「オジマさん、オモアミルク一杯で顔真っ赤になってたわ」

「花尾形さんは何飲んだの？」

「サワー」

「右門さんは？」

「焼酎」

「伴内宙太さんは？」

Tは、質問に答えなかった。

「俺が大リーグボール18号についての弱音を告白したらな？『周りの評価を求めるな。自分を貫け！』って四人とも応援してくれた。『君が準備している間、僕たちも迎え撃つ準備をしておくよ』って花尾形さんが言ってくれてな？ 右門さんもオジマさんも伴内宙太さんもそれに賛同してくれてさ……」

僕は、伴内宙太さんが注文していた飲み物が気になって仕方がなかった。

「なあ、スターイットツ。俺は真正銘の幸せものだよ。あの瞬間、知らないうちに求めている評価の殻を破ることが出来た。俺はもう誰の評価も気にしないよ」

伴内宙太さんは、ビールかな？ それとも、ワインかな？

「君に一つだけ訊ねたいことがある」

僕は日本酒であって欲しいと思う。

でも、リキュールだったら可愛いなと思う。

「このアロハシャツどう思う？」

僕は伴宙太さんの飲み物を考えていたはずなのに反射的に言葉を発していた。

「速攻評価求めてもうてるやん」

「今完全にスターイッツテツが乗り移っていたよ」

とTは頬を赤らめながら言った。

「そんな君にご褒美をあげようと思う」

十六インチの画面に映る替え玉は終始、想定内を貫き通していた。

「もしかして？」

僕は伴内宙太さんが注文した飲み物の答えを教えてもらえると思い込んだ。

「新之助さんも同じことおもてると思うわ」とTが言った。

「松田さんも浜本さんもイワシ師匠も思てるかな？」

「もちろん同じことおもてるよ」

缶チューハイを片手に環状七号線を歩いていた頃のTの表情が蘇ったようだった。

「シューマツソさんも、伊藤山くんも博文くんも……」
いとうやま ひろふみ

「だからちよくちよく同一人物挟むのやめて貰える？」

「すまんすまん。伊藤山くんも博文くんも……」

「ずっと初代なのやめて貰える？」

「だって、初代って偉大な人物やから敬意を表したいやんか？」
「敬意の表し方が独特なのよ」

僕は、速い流れの空間に一度、ブレーキを踏んだ。

「……そんなことよりも……ご褒美、貰ってもいいかな？」

「そやったそやった」

Tは黄色いネオンの中で身を整えた。

「あ、それよりもこのアロハシャツどう思う？」

「すぐに評価求めるんもやめて貰える？」

「そやったそやった」

部屋の端っここにはフルフェイスヘルメットが転がり落ちている。

「やっぱりハイビスカス柄が似合う人間って限られてると思うのよ」

「自己評価もやめて貰える？」

「じゃあどうやったら評価してもらえるねん」

「評価の殻、一つも破れてへんやんか」

「正直、評価求めなやっていけへんやろ？」

「どの口が言うてんねん」

テレビの放映が、そろそろ終わりを迎えようとしている。

「そんなことよりも、僕はご褒美が欲しいのよ」

「そやったそやった」

Tがちらりとテレビ画面に目をやった。

「そこまでしつこく言うのならご褒美をあげますよ」

カントリーマムのゴミ屑が床に転がり落ちている。

僕は、伴内宙太さんの注文した飲み物をウイスキーダブルロック一択に絞り込んだ。

「それでは……」

その時、テレビ画面から無数のシャッター音が聞こえた。
Tは開こうとした口を一旦抑え、テレビ画面に視線を移した。
そして、用意された言葉を洩らす。

「大リーグボール18号って何やと思う？」

僕は二三秒真剣に考えるふりをしてから、

「サバンナで野生動物と共存すること？」

と、答えていた。